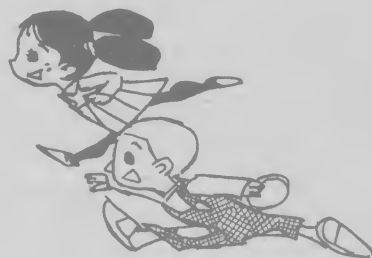
ガロ バックナンバー特価サービス!!

1年分を1000円で!!

「**ガロ**」も愛読者の皆様のご支援により創刊以来5年目をむかえましたが、**バックナンバー**をまだお読みでない方のために下記の通り**特価サービス**を行ないます。

白土三平、水木しげる、つげ義春
永島慎二、滝田ゆう、楠　勝平
つりた・くにこ、勝又進、藤沢光男
佐々木マキ、田代為寛、池上遼一、
諸先生の作品の
数々をこの機会
にぜひ!!

近所の書店へ
御注文下さい

<12冊セット>

Ⓐセット41年4月号〜42年3月号

Ⓑセット42年4月号〜43年3月号

1セット　特価1000円(〒共)

Ⓐ Ⓑ セット明記の上代金を添えて直接当社までお申込み下さい。（美本でない本もありますのでご諒承下さい）

申込先・東京都千代田区神田神保町1−55 青林堂

「ガロ」大きくならないで

関田　哲（岐阜・16歳）

僕は10時間眠らない事には、次の日、もうまともに活動できないのだ。今、時計は11時半。それなのに僕はこんな物を書きはじめてしまった。こんな事はやめればいいのだが、それでも

「ガロ」に投稿するのは、はじめてです。〝「ガロ」私感〟を述べます。まず雅という言葉（この場合、俗という語の反対語として書くのだが）をこの雑誌に当ててみたい。大体、次号の予告も編集後記もない所が実にいい。置いてない本屋もある所がいい。そんな「ガロ」には商品の臭いはないし、流されてゆく物という感じもない。大体、売れているのだろうか、この雑誌は。

私感を述べれば、発行部数はのびてほしくない。そして整わないでほしい。（整うというのは、僕がこの雑誌を悪い意味でなく雑であると思っているからなのだけれど）　その意見に裏付けをするのもめんどうなので、やめて、話は変わる。

先日、僕の友達が路の隅でうずくまっているこじきを見て「ガロの編集長はきっとあんな風だ」と笑って言いました。（無論、悪意などなく）　この話もそれで終わって、二つ目〝「ガロ」私感〟を述べます。それは、創造的である事。ここに何かが創造されたとしよう。創造という言葉から、その物は、この世の中になかったわけだ。したがって、それに対する道理も観念も、この世界にはない。だから創造された物は理解されないのが普通だし、創造された物を前に、現在の観念でのぞむ事もいけない事だと思う。「ガロ」は創造的なのだ。僕は勝手にそう思って、うれしがるのだ。

さて、僕の言いたい事はそれだけだ。説明が不充分である事を感じつつ、僕はもう筆を置く。だって僕は10時間の睡眠を必要とする、それも16歳の若僧なのだから。

支離滅裂の内に——サイナラ御同輩。

読者サロン

滝田ゆうの〈ことば〉の二様性

井村　徹（京都・21歳）

カット・佐々木マキ

これは滝田ゆう特集号の中で菊地浅次郎氏が述べられていることであるが、《滝田の作品にあっては〈ことば〉は二様に描かれる》という指摘は面白いと思う。

ぼくが以前から注目しているのは、《人物が反射的に想念に浮べる図が象徴することば以前のことば》と菊地がいう吹きだしの中のカットのような図である。この図にはどんなことばを以てしても、それを言い表わすことが不可能な人間の感情が見事に表現されていて、これこそ滝田漫画の持つ独壇上である、とぼくは考えているわけです。

〝キヨシ！〟と母親に呼ばれてビクッとする時に描かれる包丁の図など、心憎いばかりです。それが同時にユーモアに直接つながって読者の笑いを喚起させるから不思議です。

このカット図を言語に転化したら、少しも面白くないのは明らかです。勿論、ことばの持つ面白さは別にある。が、滝田作品に限ってこの《ことば以前のことば》が、ことば以上の意味を持って迫ってくるのは、注目に値する。滝田ゆうはことばを越えた次元にまで漫画をもっていった。

ことばで表わすということは、その言いたい事の、時には大半を落してしまうということにもなりかねない。その中で漫画が真に漫画であるのは、その表情の図に由来する。それを一歩突っ込んで漫画で心理を表現する滝田ゆうの技法に、ただただ感心するのである。五月号の「花あらしの頃」の最後のコマのろうそくなどいい例である。

ぼくは、つげ義春の漫画と滝田ゆうの漫画を、すべて言語に転化して、漫画と同じ感動を伝えることが出来るかと試みたが、所詮それは無理なことであった。「巨人の星」が小説で出されたけれど面白くなかった。ことばの限界が意識され、ぼくは将来、文学も映像を表現方法とする方向にむかうのではないかと感じ始めている。

滝田作品の吹きだしのカット図は、ことばという表現方法の限界を教えた。それはつげ義春の作品の持つ重さと同じ比重で、ぼくに問い始めている。

つりたさんに想う

林原雅史（広島・21歳）

つりたさんって、どんな娘さんかしら。「溝」（六月号掲載）読んで惚れてしまいました。それで、大急ぎでつりたさんの前の作品を読んでみたんですが、やっぱり「溝」が一番よかった。同じテーマの「音」もよかったけれど「溝」のほうがより完成されていたから。処女作「ナンセンス」の新聞の中に、色々と自己宣伝してあったけど、それを信じると現在21歳で、誕生日は10月25日とか。プレゼントでもしようかな、ボーイフレンド求むってあったけど、もう彼氏できちゃったかしら。一報求めたいところですね。

ところで作品の話だけれど、「音」（本年三月号掲載）以前は駄目ですね。文学少女的な青臭さがあって、読んでいて気恥かしくなっちゃうのです。悩苦する青春をポーズとしながらも、その裏でつりたさんはちっとも悩んでいず、へらへら笑いながらやきいもでも食べていたんじゃないかと思って、厭なかんじでした。でも「音」以後（といっても他に「溝」しか知りませんが）つりたさんは本質的テーマを見つけたような気がして興味を抱かせます。つりたさんの示すアレゴリー（もっとも

今日他の形式が可能だとは思いませんが）は、逆説として示されたつりたさんの悩苦を、よく表明していると想います。

ある朝目覚めたら、主人公（？）は声だけになってしまい、かつてその声の住家であったろう肉体は、声にとって見知らぬ他人だった。これは「音」の冒頭ですが、あまりに今日的な（いや今世紀的な）状況設定です。肉体と声、あるいは肉体と意識が完全に分離し、それぞれが自立を始めるという、ずっと昔ポーがスティーブンスンが描いたことです。だがつりたさんが独得なのは、その意識の面にスポットをあて、意識が結局のところ空無であり、非在に過ぎないことを描いた点です。カフカの影響なのでしょうか、それともサルトルの影響なのでしょうか、あるいはつりたさん自身による認識なのでしょうか。

大好きな「溝」では、「音」の声は肉体をもった寒がりの主人公に具現されます。男のようでもあるし、女のようでもある主人公は、意識がそうであるように中性なのでしょう。夏だというのに下宿でコタツに入ってぶるぶる震えている主人公は、きっと心臓が悪くて血行がよくないのでしょう。意識ってものは大抵心臓病みなものですから。意識ってものは、常に対象がなければ存在しないくせに、ドストエフスキーの頃は、いばっていたものです。それが結局のところ心臓病みの寒がりだったとは。ザムザが「地下室の住人」のパロディーであったように、つりたさんの中性の人間も「地下室の住人」のパロディーなのでしょう。はくしゅかっさいです。

でもこの後つりたさんはどうなっちゃうのでしょう。つげ氏の「海辺の叙景」的なものになっちゃうのでしょうか。文学少女に逆戻りですね。

原点へ引きもどすマンガ

池田　彰（東京・21歳）

私はつげ忠男の「昭和ご詠歌」の中に、私自身の過去を見てしまう。それは、見たくもない私自身の内面だ。そして、そこから主要に感じるのは「怒り」と「汚辱」である。

四・二八沖縄解放闘争から帰って疲労した肉体を横たえながら「昭和ご詠歌」を読んだ。再び「怒り」と「汚辱」が私の内に広がり、闘争の前に読んで見ておくべきだったと反省した。そうすれば、闘争を前にして、高倉健みたいに意気がったり、あれやこれや考えて興奮せずに、スッキリと「怒り」と「汚辱」を満身に受け止め、もっと冷静に沈着に国家権力と対決できたと思った。

私達の「現在」は「未来」に規定されると思っている。しかしながら、「つげ忠男」は「怒り」と「汚辱」の過去を、あばき出すことによって私達の未来を規定し、現在を規定しているのではないだろうか。それは、単に〃風がふいているだけ〃のような感傷的な過去でなく、ともすれば見ようとしない過去、見たくもない過去、すなわち私達が常に検証し問いつめなければならない原点へ引きもどすのではないだろうか。それは、自己欺瞞も逃避もゆるされない、きびしく自己と対決しなければならない自己の内面性を見ることなのだ。そうであるがゆえに、私自身「つげ忠男」の作品を「読んで見る」のはこわくて、逃げたくてしょうがなかった。

帝国主義的支配秩序が、私達の日常性にまで侵入し、個々バラバラに未来を展望したり、逃避したりしがちな現在、「つげ忠男」は私達の欺瞞的なベールを原点へ引きもどし、私達の欺瞞的なベールを引っぺがし、裸にしてしまう「わいせつ」な漫画家だと思っている。

〈高級読者〉、消滅せよ！

山田　治（兵庫）

ここに一人の少年がいる、名前は藤井健一郎。ともかく彼の言うことを聞いてみよう。「例えば、佐々木氏が彼独特のタッチで一人の狂人を語ったとしよう。そして我々が、彼が画いたものは一人の悲しい正常人の姿を描いたものだと読みとっても、それは一向にかまわないのである。勿論、こんな文章は括弧でくくっただけで正体を暴露する類のものであって、そんな人間に正しい批評ができる筈がないとか、他のマンガ家のものをそうとれないのは彼の想像力の貧困だとぼくが饒舌に指摘してみたところで読者をうんざりさせるにすぎないでしょう。

しかし我慢して頂いてもう少し彼の意見を拝聴しよう。彼は「カムイ伝」を「丁度司馬遼太郎とか海音寺潮五郎氏の「坂本龍馬」とか「天と地と」とかの類の嘔吐するような馬鹿馬鹿しさの大型ドラマにすぎない」とおっしゃる。大衆文学にもなかなか通暁していらっしゃるようだが、「坂本竜馬」や「天と地と」が《嘔吐するような馬鹿馬鹿しさ》を持っているというのは君のかいかぶりでしょう。「カムイ伝」についてももちろんそうです。《嘔吐する》というような最大級の賛辞はサドやバタイユくらいにしかあてはまりません。君の推奨する〈サルトル〉の「嘔吐」などは眠気と軽蔑しか催しません。

しかしさらに笑止な事は彼が、人が「カムイ伝」を読むのは「政治的なこと、或は人間の行動に関して考える」からとでも思っているらしい事です。これには彼の言葉を借りて、「御都合主義も甚しい。」と言っておけば足りるでしょう。このサルトルの「自由への道」くらいを読んで啓蒙された（或はそう思っている）らしい18歳の論客はまた、こんなことさえ言ってのける。「林、佐々木両氏を擁護する論客が読者サロンに姿を見せないのは読者サロンの程度を下げるだけだから、早く姿を見せてほしい。」まったくこの男は泥足で雑巾がけをする者に似ている、自分の足の裏の見えないのはごもっともと言うしかない。

ところで、ぼくはもちろん林あるいは佐々木氏をないがしろにしているのではない。（藤井君、喜べ。仲間ができたぞ。）林氏の土俗的な志向の中にうかがえる情況の呈示（鋭いとはいえないが）や、佐々木氏の青年らしい焦燥感や成熟への拒否には少なからず共感を覚えるのだ。しかしぼくには彼らが《前衛》作家だとは思えない。たとえば藤井君の絶讃する「巨大な象」にしろ、まさに情況に先取りされて、その上に何もつけ加えることができず、またあまりに図式的で滑稽でさえある。露骨な、しかもかわりばえのしない比喩が繰り返され、ややうんざりする。「聖灰曜日」というシリーズ名にしてからが、多分エリオットの「聖灰水曜日」あたりからの思いつきだろうが、エリオットの表現を借りれば、彼にはまだまだ「時を贖え、より高い夢のまだ読みとかれぬヴィジョンを贖え。」という言葉が投げつけられねばなりません。この共産党の機関紙を〈前衛〉の目安と考えているような若者にとって、佐々木マキの作品がキンキラキンに光って見えるのも無理はないのでしょうが。

今月の本棚

おこつ狂騒曲

滝田ゆうにとって〈死〉とは何か、と開き直って問いかけてみたってはじまらない。でも、気になって気になってしょうがない。とにかく、この本に収められたマンガは、〈死〉をテーマとしたものが多いのだ。「おこつ狂騒曲」然り、「お通夜の客」然り、「終列車」「宝石」「鍵」「しゃばっけ」「あしがる」またまた然り。生きているのか、死んでいるのか、いやいやちがう、生きてるやつが死んでいて、死んでるやつが生きている。といったドンデン返しが延々と続く。ゲラゲラ、ニタニタ笑って読んでいるうちに、心臓が止まっていた、なんてことが起らないともかぎらない〝恐怖マンガ〟なのである。「ぼかァ　女房も子供もあるんですよ」と自嘲をこめた恨み言が、〈死〉の世界から響きわたってくるではありませんか。

▽一五四頁・二四〇円・東考社発行＝東京都府中市朝日町2丁目29の11

眼光戦線

〝日刊を目指す唯一の映画煽動誌〟と華々しくデビューして現在七号。残念ながら、いまだ月刊の線を許している。深山美里、青木一端の二人を中心とした特殊な映画批評誌で、毎号特集を組んでいる。一号・「金瓶梅」「三里塚の夏」、二号・ゴダール、三号・今村昌平、四号・吉田喜重・東大闘争、五号・歌謡曲映像、六号・石井輝夫・春闘労働者、七号・膳閣下、といったあんばいで、映画だけでなく広い範囲に批評対象を求め、マンガにまで及んでいる。五号には、深山美里の「林静一・花の詩シリーズ第3回」論が載っていた。因みに七号は「膳閣下」特集であると同時に可愛いお嬢さん「堤真理さん歓迎号」でもあるのだそうだ。

▽十六頁・百円・眼光戦線発行＝東京都新宿区左門町七宏栄荘内

眼

前者を軟派と解すれば、こちらは硬派とでもいえましょう。なんせ〝映画理論誌〟なのですから。創刊号では、そのものズバリ〝映画とは何か〟と原理論を熱っぽく追求する。執筆者は、画家の前田常作のほか有馬弘純、大沼鉄郎など。また座談会「今日の文化状況をめぐって」では大島渚、北小路敏、野田真吉、佐々木基一らが、〝70年状況〟と絡ませて、映画のあり方を検討している。巻末に連載されることになった「映画史年表」は貴重な資料といえる。年表の序に「〝映画の歴史〟ではなく、〝歴史の中の映画〟として、映画史をみつめるとき、文学等の他ジャンルと映画がいかに決定的に異なるものであるか、なぜ〝映画〟は二十世紀後半の〝文化〟なのか、はっきりしてくるのである。」と記されている。

▽B5判・一五六頁・二五〇円・杉並シネクラブ発行＝東京都杉並区成宗一の一〇七

地下演劇

〈やっと当った2DK　安心したら
産きちゃった　そんな　おまえが我
が息子　産む事に理由はない　何故
産んだ　なにんも無いぜ　ありゃあ
しない　続くぜ続くぜ死ぬまでは
切って下さい　この体　切って切れ
ない怨みの文字を　両手にこめて
引くともに　あらあ　母親殺しの花
が咲く

以上は、久留米団地であった26歳の青年の母親殺しに題材をとった林静一の「犯罪論」の一節である。

▽A5・一二〇頁・三〇〇円・グロオバル社発行＝東京都渋谷区渋谷三の十一の七

月報

▼四月十五日に発行した『つげ義春作品集』は、「朝日新聞」「読書人」「映画芸術」「ほるぷ新聞」「平凡パンチ」「芸術生活」「週刊言論」等々の書評にとりあげられ、予想以上の好評でした。今後も単行本を続刊していく計画ですが、第二弾として、九月に『滝田ゆう作品集・寺島町奇譚』を発行すべく準備をすすめています。ご期待下さい。

▼「ガロ」7月臨時増刊号として「永島慎二特集」を発行いたしました。「ク・ク・ル・ク・クパロマ」「少年の夏」「雨月物語」など他誌に掲載された作品も収めた永島慎二氏独自編集の特集号です。二六六頁・二〇〇円。ぜひ書店にお申込みを。

▼佐々木マキ氏は、六月から『朝日ジャーナル』に毎週三頁のマンガを連載することになりました。本誌と併せてご愛読下さい。半年連載の予定だそうです。

林静一氏の「赤とんぼ」（ガロ68・6）が『女性自身』に転載されましたが、六月には同誌に書き下し作品が発表されます。なお、林氏は、天井桟敷発行の『地下演劇』創刊号に「犯罪論」を執筆しています。

▼「もっきり屋の少女」以来一年間ご無沙汰のつげ義春氏、本当に近々大作六〇枚を「ガロ」誌上に発表する〝予定〟。